

Follow up

—会長の時間6—都はるみ“千年の古都”について

本日は、このコロナ禍でビアパーティーが叶いません。

そこで親睦委員会のお力添えで、ボーカル、はいどらんじあ yoco さん & 西村早紀さん、ピアノ増田陽子さん、ギター村端昭彦会員による“スタンダードポップスと昭和歌謡の屋下りコンサート”の開催に至りました。ご出演の皆様、親睦委員会の皆様有難う御座います。

さて会長の時間ですが、本日の楽曲に夏の京都の風景が入った一曲、都はるみの歌を無茶ぶりをお願い致しました。1964年デビューですから今年歌手デビュー56年を迎える都はるみ、彼女に故郷を歌った歌があります。1990年発売の「千年の古都」。

1984年、実績人気ともに絶頂期でヒット曲を連発していた36歳「普通のおばさんに戻りたい」と突然引退宣言。普通のおばさんの生活を送った後、1989年6月に52歳で亡くなった美空ひばりの訃報に触れたのを機に歌手復帰を決心。この年の『第40回NHK紅白歌合戦』に出場、「アンコ椿は恋の花」を歌唱。引退後、丸5年ぶりのステージではありましたが、以前と変わらぬ歌声を披露し、復帰の声が一層高まります。翌1990年、歌手活動の完全復帰を発表。従来の演歌に捕らわれない幅広い作品も歌う様になっていきます。

約5年半を経ての復帰に際し、初めて自らプロデュースをし、復帰第一弾の曲としたのがこの「千年の古都」です。都はるみ生まれは西陣織で有名な京都上京区作庵町。15歳でコロムビア全国歌謡コンクールに優勝し、夜行列車で上京したそうです。「アンコ椿は恋の花」「北の宿から」などヒットを重ねるなか惜しまれつつ表舞台に一度は背を向けます。“いまドキ関西；歌物語”によりますと、心は静かな生活を求めているそうで、休業中は都内の自宅でテレビを見たり家事をしたりとまさに普通のおばさんだったそうです。そしてそんな生活で夏の大火文字焼きなど幼い頃の懐かしい風景と家族の思い出が心に浮かんだそうです。都はるみの両親は自宅で機（はた）屋を営んでおり、引退するまでは「朝から晩までガシャガシャうるさくて嫌でしょうがなかった」との事でした。40歳を前に故郷を思って初めて都はるみは、5人の子を育てる為に休日もなく一心不乱に働いた親がとてもいとおしくなったそうです。はるみは、復帰に際し、「大阪しぐれ」など代表曲を手掛けた故吉岡治に「これまでの生き方を映した楽曲を歌いたい」と自らこの原案を持ち掛け完成させたそうです。

「衣笠山」 「機（はた）織る音」 「地藏」

都はるみは以前のインタビューで「母が京都で見たと思われる情景を作詞家に織り込んでもらった」「ようやく親への感謝が持てる年齢になった」と語っています。東京で20年間働き続けた日々から解放されたからこそ母への思いが形になったのだと思います。

その後、舞台上しばしばはるみが「年取るって悪い事じゃないんだよね、捨てたもんじゃないんだ」と口にしていました。これをジャズポップシンガーに無茶ぶりでお願ひし歌唱して頂く事となりました。お聞きになる時、このストーリーが浮かんで頂ければ望外の幸いです。

皆さん！年取るって捨てたもんじゃないですね

おやかましゅうございました、本日は、これにて。

2020年8月27日第七例会 会長の時間にて 東野裕暢